

JATLaC

言語文化教育学会

第 11 回大会

JATLaC

言語文化教育学会

第11回 大会プログラム

2011年 12月 3日(土) ・ 4日(日)

会場： 早稲田大学 早稲田キャンパス

3日：16号館1階107教室

4日：7号館2階206教室

参加費： 1,000 円(当日受付にて 学生証提示の方は無料)

使用言語： 日本語

・ 12月3日(土)

招待講演 : 10:30-12:00

平田 オリザ 氏 (劇作家・演出家、

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、

内閣官房参与)

「対話の時代に向けて

—コミュニケーションのデザインとは何か—」

シンポジウム : 13:30-17:30

「大学で培うべきコミュニケーション能力とは
—日本社会で何か求められているか—」

コーディネーター： 矢野 安剛 氏（当学会会長・早稲田大学名誉教授）

パネリスト： 長部 謙司 氏（シスコシステムズ）

Melanie CZARNECKI 氏（立教大学）

宮田 勝正 氏（シスコシステムズ）

渡部 忠 氏（マガジンハウス・ターザン編集部）

ディスカッサント： 平田 オリザ 氏（劇作家・演出家、内閣官房参与、
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授）

・12月4日(日)

個人発表 : 10:00-13:30

10:00-10:30 深津 文乃(早稲田大学大学院)

「日本の小学校英語教育における教室内のインタラクション分析」

10:30-11:00 萩原 伸一郎(愛知高等学校)

「by と near の近接概念に対する指導法について」

《休憩:11:00-11:10》

11:10-11:40 三角 友子(元タマサート大学)

「日本語の「NP1 はNP2だ」の意味—関連性理論の観点から—

11:40-12:10 中山 富子(昭和女子大学大学院)

「てしまう」の語用論的機能—ポライトネス理論からの考察

《休憩:12:10-12:20》

12:20-12:50 島田 友絵(昭和女子大学大学院)

「低学年で来日したJSL児童の学力の基礎になる日本語能力の育成

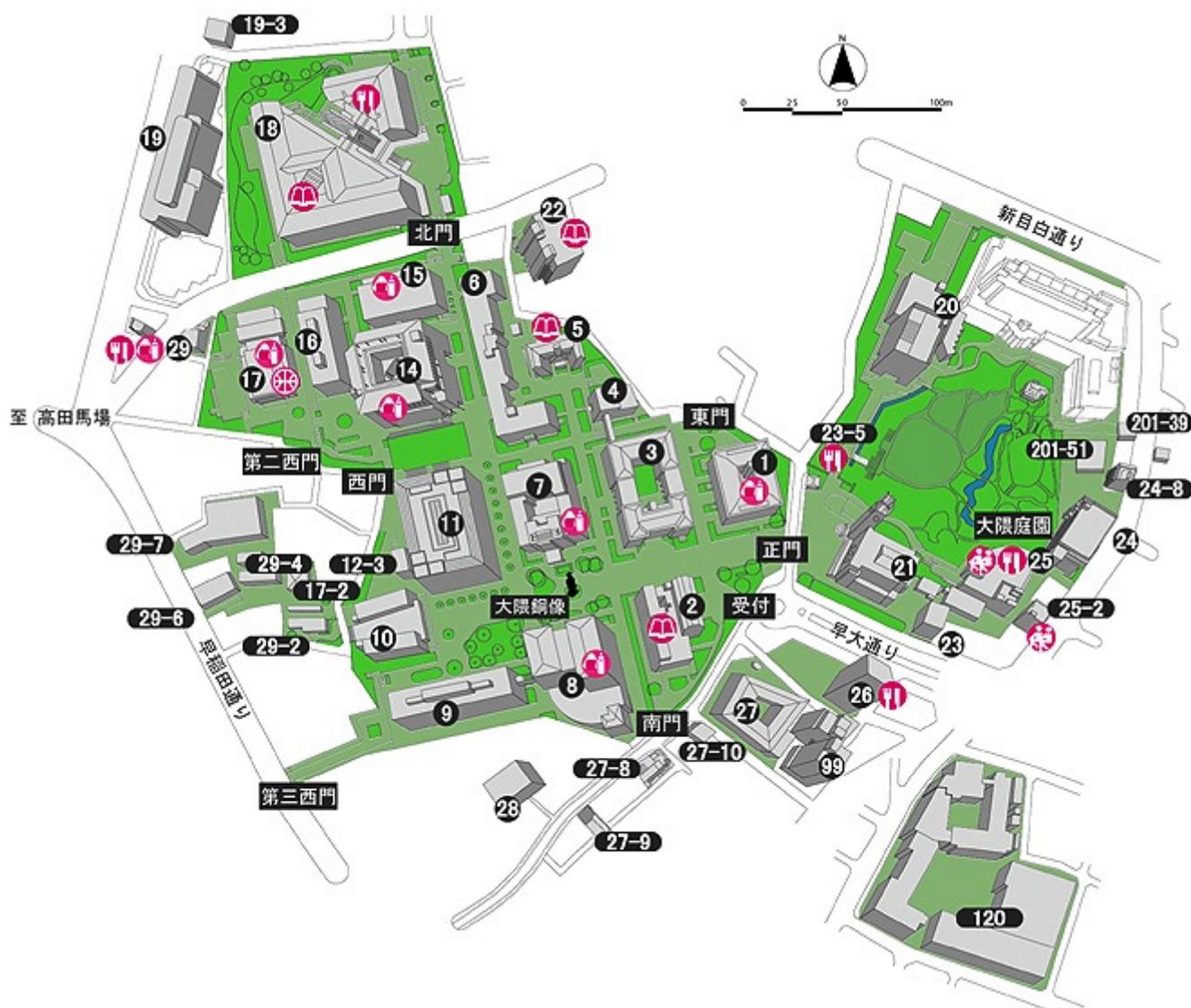
—来日1ヶ月目から、10ヶ月間にわたる縦断的調査の結果から—」

12:50-13:20 林 千賀(城西国際大学)

「日本語学習者のコミュニケーション能力—語用論的誤用から—」

閉会式 : 13:20-13:30

早稲田キャンパス配置図



i ショップ
 ⚽ 体育館
 📖 図書館
 🍴 食堂
 🏠 保健センター

- 1号館 入学センター事務所・現代政治経済研究所
- 2号館 會津八一記念博物館・大隈記念室・高田早苗記念研究図書館
- 3号館 政治経済学部・政研・経研・公共経営研究科
- 4号館 政治経済学部（研究室）
- 5号館 演劇博物館
- 6号館 坪内博士記念演劇博物館・教育学部・ITセンター・オープン教育センター／生協売店
- 7号館 大会会場（4日：2階206教室）
ポータルオフィス・国際コミュニケーションセンター・障がい学生支援室・保健室
- 8号館 共通教室・法学部・法学研究科・比較法研究所
- 9号館 共通教室

10号館	共通教室・男女共同参画推進室
11号館	商学部・商学研究科・会計研究科・産業経営研究所・WBS研究センター ・国際教養学部／コンビニエンスストア
12号館-3	社会科学研究科（教室）
14号館	共通教室・大学院（社会科学・教育学研究科）・社会科学部
15号館	共通教室
16号館	教育学部・大会会場（3日：1階107教室）
17号館	体育館・生協ライフセンター／ブックセンター／トラベルセンター
17号館-2	甘泉寮
18号館	総合学術情報センター（中央図書館・井深大記念ホール・国際会議場）
19号館	早大西早稲田ビル・アジア太平洋研究センター・アジア太平洋研究科
20号館	大隈会館（本部事務所）
21号館	大隈講堂
22号館	早大インターナショナルセンター・国際部・学生交流企画課 ・留学センター・日本語教育研究科・日本語教育研究センター
23号館	エクステンションセンター本館
23号館-5	UNI. Shop & CAFE125（喫茶/軽食）
24号館	メディアネットワークセンター・遠隔教育センター
24号館-8	ハラスメント防止委員会
25号館	大隈ガーデンハウス（2.3F 学生食堂）・キャリアセンター
25号館-2	保健センター
26号館	大隈記念タワー・公共経営研究科・125記念室・文化推進部
27号館	小野梓記念館・小野記念講堂・法務研究科 ・ワセダギャラリー・インフォメーションスクエア
27号館-8	人間科学部・人間総合研究センター
27号館-9	早稲田文化芸術プラザどらま館
29号館-2	エクステンションセンター別館
29号館-4	研究室
29号館-6	研究室
29号館-7	国際情報通信研究科・国際情報通信センター
99号館	早稲田STEP21・学生住宅センター・寮室棟・芸術学校教室
120号館	研究開発センター・大学史資料センター
201号館-39	平山郁夫記念ボランティアセンター
201号館-51	教職員健康管理室

基調講演

12月3日（土） 午前10時30分～12時

平田 オリザ 氏

劇作家・演出家

大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授

内閣官房参与

司会 : 矢野 安剛 会長

講師紹介

平田 オリザ (ひらた・おりざ)

現在、大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授、四国学院大学客員教授・学長特別補佐、埼玉県富士見市民文化会館キラリ☆ふじみマネージャー、三省堂小学校国語教科書編集委員、(財)地域創造理事、(財)舞台芸術財団演劇人会議評議委員、日本演劇学会理事、日本劇作家協会常務理事、東京芸術文化評議会評議員、BeSeTo演劇祭日本委員会委員長。

演劇はもとより教育、言語、文芸などあらゆる分野の批評、随筆などを各誌に執筆。近年は、公演やワークショップを通じて、フランスをはじめ韓国、オーストラリア、アメリカ、カナダ、アイルランド、マレーシア、タイ、インドネシア、中国など海外との交流も深まっている。また、2002年度から採用された国語教科書に掲載されている平田のワークショップ方法論により、年間で30万人以上の子供たちが、教室で演劇を創るようになっている。他にも障害者とのワークショップ、地元の駒場ほか、各自治体やNPOと連携した総合的な演劇教育プログラムの開発など、多角的な演劇教育活動を展開している。

対話の時代に向けて

はじめに

昨今、コミュニケーション能力、コミュニケーション教育という問題が、いささかヒステリックなほどに叫ばれている。本講演では、劇作家、演出家として、また大学でコミュニケーション教育に関わってきた者として、「コンテキスト」と「対話」をキーワードに、コミュニケーションの問題に関するいくつかの経験を、できる限り言語教育の分野に引きつけながら語ってみたい。

I. コンテキストのずれ

a. 「旅行ですか」という台詞

高校生、大学生などを対象とした演劇ワークショップで、「列車の中で他人に話しかける」というテキストをよく使うが、意外と適切な会話をすることは難しい。

見知らぬ他人に話しかけるかどうかは、民族性、国民性をも反映し、また同じ民族でも、個々人の性格によってばらつきが起こる。

「旅行ですか」という簡単なフレーズでも、民族ごとに、そこに含有するコンテキストは異なる。同じ民族でも個人差があり、民族性だけを前提にして教授法を決定するのも限界がある。

私たち言語教育に関わる者は、民族性、国民性、あるいは何語を母語としているのかと言った大きなコンテキストのカテゴリーと、個々人の話し言葉の個性という小さなカテゴリーを、同時並行的に見ていかなければならない。

コンテキストベース、さらにはパーソナルベースの教育を考えるなら、演劇を用いるオルタナティブな教材は、今後有力なツールとなるだろう。

b. コンテキストのちがひ、コンテキストのずれ

文化的な背景などが大きく異なる場合の「コンテキストの違い」は、比較的発見しやすいが、同じ民族間や、近い文化を共有している人間同士のなかで、その個体差から来る「コンテキストのずれ」は発見が難しく、ここにコミュニケーションの落とし穴があるのではないかと私は考えてきた。

c. コンテキストを理解するとはどういうことか？

ここでいう「コンテキスト」とは、その人がどんなつもりで言葉を使っているかの総体のようなものだと考えてもらえばいい。相手がどんなつもりでその言葉を使っているのかを、深く掘り下げて理解する能力は人間固有のものであり、コンピューターはこの領域では、まだ人間に追いつくことができない。

II. コミュニケーションデザイン

a. コミュニケーションデザインとは何か？

「コンテキストのずれ」を解消するには、言葉の一義的な意味だけを追っていたのでは限界がある。コンテキストを共有するという事柄が双方向的である以上、発話者の言語能力だけを高めても意味がない。発話しやすい環境をどう作っていくかが問われている。

コミュニケーションデザインとは、まさにこのような視点に立って、コミュニケーションに関わる人間とそれを取り巻く環境のあらゆる諸要素に注目して考察し、また具体的な打開策を検討していくという考え方だ。この新しい学問領域は、今後、言語教育にも大きく応用される可能性があると考えている。

b. シンパシーからエンパシーへ

「コンテキストのずれ」を解消するためには、発話者と、発話すべき対象（たとえば台本）を同一化させるシンパシー型の教育から、発話者と発話すべき対象の共有できる部分を見つけるエンパシー型の教育へ変えていかなければならない。

III. 対話の時代に向けて

a. なぜ演劇なのか

およそ、どんな共同体も、長い時間をかけてコンテキストの摺り合わせを行っている。しかし、演劇は、短い練習期間で、表面的かもしれないが、コンテキストを摺り合わせ、イメージを共有するノウハウを持っている。

b. 協調性から社交性へ

今後、日本社会にとって重要なのは、価値観を一つにする方向の「協調性」ではなく、異なる価値観を持った人間が、どうにかして社会を運営していくための「社交性」だろう。だとすれば、短期間で、コンテキストをすり合わせる演劇のノウハウは、今後の日本社会のコミュニケーションを考える上で、大きな示唆をもたらすものとなるだろう。

シンポジウム

13：30-17：30

「大学で培うべきコミュニケーション能力とは —日本社会で何か求められているか—」

コーディネーター： 矢野 安剛 氏（当学会会長・早稲田大学名誉教授）

パネリスト： 長部 謙司 氏（シスコシステムズ）

Melanie CZARNECKI 氏（立教大学）

宮田 勝正 氏（シスコシステムズ）

渡部 忠 氏（マガジンハウス・ターザン編集部）

ディスカッサント： 平田 オリザ 氏（劇作家・演出家、内閣参与、
大阪大学コミュニケーションデザイン・センター教授）

シンポジウム (13:30-17:30)

「大学で培うべきコミュニケーション能力とは--日本社会で何が求められているか--」

現在、学生の中にはサークルなどの仲間以外とコミュニケーションができない者、また外国語の聴解力を云々する前に母語である日本語の聞きとりがまともにできない者がいると言われています。そこで、今回のシンポジウムは産学官協同と国際化が進む日本の社会がいま大学にどのようなコミュニケーション能力の養成を期待しているのかというテーマを選びました。

シンポジウムは立場を異にするパネリストがそれぞれ違った考えや物の見方を出しあい、それぞれの立場から議論するところに面白さがあります。大学で教える立場から立教大学のザーネッキー先生、社会人になって比較的日が浅い先輩の立場からマガジンハウス・ターザン編集部の渡部さん、時代の先端を行く代表的な企業の立場からシスコシステムズの宮田さん、長部さんにパネリストをお願いしました。それぞれに忌憚のない意見、批判、助言を出していただくようお願いしてあります。そして、フロアも含めて率直な意見交換と活発な討論を目指します。そして、意見の食い違いは自然なことであり、無理にある結論に導くことはすべきでないと考えています。換言すれば、「互いに響きあう知的な放談」の会です。本学会のシンポジウムは、過去10年間、パネリストのミニレクチャーではなく、議論が白熱する、真の意味でのシンポジウムを実践してきました。フロアの方々にも単に話を聞く「聴衆」ではなく、活発に反応する「参加者」であることを期待しております。

当学会のシンポジウムは4時間です。長いという印象をお持ちでしょうが、終了後はもっと議論したかったという参加者が多いのが毎年です。方法としては、まずパネリストに発題として、議論の「タネ」を蒔いていただき、主に内容の理解に限定した質疑応答の時間を取ります。ディスカッサントの平田オリザ先生にコメントをいただき、前半を終了します。休憩の後、第2ラウンドとしてパネリストに補足説明をしていただき、パネリスト、フロア全体の議論に移ります。最後にパネリスト、ディスカッサントに短くまとめの発言をしていただき、まとめと致します。

では、各パネリストの発題を簡単に紹介します。

メラニー・ザーネッキー先生 (立教大学)

日本人の学生はますますグローバル化が進む世界で成功するためには英語でのコミュニケーション能力が不可欠である。母語の日本語でもコミュニケーションすることが困難な日本人の学生にとって英語でのコミュニケーション力を高めるためにどうしたらいいだろうか。私は北海道大学の留学生(7年間)、そして日本の大学(上智、東洋、文京学院、立教)の先生(6.5年)の経験を踏まえて、この問題、特に以下のポイントに焦点を合わせて、日本の大学をこれからどう変えるべきかについて述べたいと思う。

1. 受身の授業から対話式の授業へ : 動機/自信を与えるチャレンジ
2. 日本人の学生の劣等感: 留学生と帰国子女と同じ授業を受ける場合
3. 先生=神様の概念: 批判的思考力を麻痺させる
4. 統一カリキュラムの長所および不統一カリキュラムの短所: 大学の先生に
どれほど自由を与えればいいのか
5. 担当コマ数/クラスサイズと教育の質との関係について

渡部 忠 氏 (マガジンハウス・ターザン編集部)

「インプット・整理・アウトプット」

私の仕事では、雑誌が発刊される周期に合わせて年間のスケジュールがすべて決められています。そこに合わせて我々は仕事を毎号進めて行くのですが、その過程で、「考えの擦り合わせ」という作業は常々必要になって来ます。隔週刊のTarzan では1冊を4人で作っています。ページ数が全体で、120 ページほどなので、単純に1人30 ページ程度担当。その30 ページの中でテーマが4つ、ないし5つと細かく分割されます。そのテーマごとに、ページの指針を決め、取材をし、スタッフと打ち合わせを重ね撮影をし、レイアウトの会議に望みます。

ページ方針を決めた時、スタッフとの打ち合わせ、レイアウト会議と編集者に求められるのはその都度、その段階でのプレゼンです。テーマが4つあれば2週間で最低でも12回以上は何かしらの情報を集め、各々にプレゼンをしていかななくてはなりません。一ヶ月では24回。この24回行われるプレゼンで「考えの擦り合わせ」を行い、スタッフの中で共通認識を作りながらページ作りを進めて行きます。

我々に求められているコミュニケーションスキルとは、

- *情報を集めて来て、ページの方針をまず決める事。
- *プレゼン後、スタッフがどういう認識を持ったかの把握。
- *取材してきた内容の取捨選択。
- *レイアウト会議での簡単、明快な説明。

膨大な情報を絞り、まとめて、一言キャッチーにまとめる。これが今、現状私（出版という狭い世界での話です）に求められているコミュニケーションのスキルと言えます。学生時代の自分を思い返せば、大量のインプット、整理をする機会があったのにもかかわらず、無為に過ごしていたことに多少の後悔を感じています。

宮田 勝正 氏・長部 謙司 氏 (シスコシステムズ)

1. 自己紹介-長部&宮田

自己紹介を通じて、我々のバックグラウンド（キャリアパスや経験）や、現在のシスコでのポジションと責任について理解してもらうことで、セッションを通じたディスカッションの意味やその理由についての理解を深めてもらいたいと考えています。

宮田：グローバル組織の日本担当として、どのような職場環境化を理解してもらいながら、日々業務を通じて行っているコミュニケーションについて解説

長部：日本における若手エンジニア育成の責任者として、企業が求めている人材像と、次世代のエンジニアを育成するために教育機関や生徒とどのような活動を行っているかを解説

2. シスコのカルチャーや環境について

- 参加者に対して、シスコとはどのような会社なのかを理解してもらうことを目的として、社内のカルチャーや職場環境について解説
- グローバルでフラットな組織、組織とバーチャルチーム
- ローカルとグローバルビジネスニーズの両立

- Follow the Sun モデルのオペレーション
- Manager よりも Leader?

3. シスコのようなグローバル企業におけるコミュニケーションの事例

シスコでは、目的、相手（ポジション）、環境・場所や時間帯によりさまざまな方法でコミュニケーションをしています。シスコとしても、IT 技術を活用した職場環境の改善を図るツールとしてさまざまな製品を開発していることもあり、外資系企業の一例として、どのようなコミュニケーションが企業には存在するのかを、事例を通じて理解を深めてもらいたい。

- ビデオ会議、電話会議、インターネットを使った会議アプリケーション
- F2F ミーティング
- グローバルな会議や参加者
- プレゼンテーションやブロードキャスト

4. 会社が求めている社員に関するコミュニケーション能力とは

コミュニケーションというと、「相手に話す」ということをイメージする方も多いと思うが、私が考える社内のコミュニケーションの定義は、「自分が伝えたいことを、さまざまな方法を使って相手に伝え、理解して行動（なっとくの上）をしてもらうことで結果を出すこと」ということです。しかしながら、ビジネスの世界においては、更に利害関係、カルチャーの違い、個人としての知識や経験（自分の価値）による難しさがあると感じています。

シンポジウムを通じて伝えたいこと

- そもそも、プロフェッショナルとしての能力や技術力（人材としての中身）がなければ相手とも会話ができません。
- 相手に伝えて理解してもらうこと。言葉のキャッチボール（聴くこと、相手を理解すること）が大切である。
- 海外の人間とのコミュニケーションで重要なのは、言葉というよりは対話の質と相手の心をつかむこと。日本人はとくに英会話という形のコミュニケーションを気にしすぎる傾向にある。
- デジタル（TV/電話会議、メール、チャット）とアナログ（手紙、会議、プレゼン）それぞれのメリット・デメリットを理解した上で、自分の武器とする

5. 大学や教育機関に対して、企業として何を求めるのか？

- ・ 国家戦略や即戦力
- ・ 専門分野の知識（即戦力）はもちろんのこと、どんな国の人でもきちんと相手を理解した上で自分の意見を伝えられて、相手が理解できるコミュニケーション能力

個人発表

12月4日（日）

午前10時00分～午後1時30分